

＜参考資料2＞ 平和賞受賞

1951年国際スターリン平和賞受賞者：モニカ・フェルトン

リディア・ペトロヴァ（要約）

12月21日、傑出した平和の闘士たちのリストである「諸民族間の平和強化のための」国際スターリン賞の栄えある受賞者リストに、イギリスの市民リーダーとして著名なモニカ・フェルトンの名前が加わった。

モニカ・フェルトンは、以前から国際民主女性運動の隊列に加わっているのみならず、イギリスにおいてその運動を拡大・強化し、その勇気と人民の大義への献身によって多くの人々から尊敬を集めている。

活発な市民リーダーでジャーナリストであるモニカ・フェルトンは、人民のニーズについて調査することが自分の第一の任務だとつねに考えてきた。彼女は社会問題に関する数多くのパンフレットや論文を書いている。労働党の一般党员たちはこの9年間、彼女をLCC（ロンドン州議会）に選出してきた。彼女は1945年以来、国会の委員会で活動し、またスティーヴニッジ開発公社の総裁を務めてきた。

国際女性デー委員会の招聘で1951年5月にWIDF（国際民主女性連盟）の一員として朝鮮を訪問したことで、彼女の名前はイギリスで一躍有名になった。イギリスを出発する前、フェルトンは友人たちに対して、自分が朝鮮に行くのはこの苦難のなかにある国についての真実を多くのイギリス人民が熱心に知りたがっているからだ、と語っている。

朝鮮において、モニカ・フェルトンは、侵略者たちがおこなった驚くべき血なまぐさい残虐行為の数々をその目に焼き付けた。彼女は「メイド・イン・グレートブリテン」と記された爆弾の破片が道端や破壊された家屋のなかに落ちているのを発見した。戦闘機が田畑で働く民間人を爆撃したときには、彼女はどぶ川に身を隠した。一人しかいない子どもをイギリス兵に殺されたある若い朝鮮人の母親が、イギリスの人々は赤ん坊を愛さないのかと問うたとき、彼女は泣き崩れてしまった。その日、虐殺された朝鮮の子どもたちの共同墓所の前で、彼女は帝国主義者たちが朝鮮で犯した残虐行為とこの戦争の真の原因について自分の国のすべての女性たちに語ることを誓った。

彼女はこの誓いを守り抜いた。朝鮮から戻ると、彼女は自分が目撃したことすべてを公然と勇気をもって著述した。破壊されていない町はひとつもなく、爆撃の被害を受けていない病院もひとつもない、と彼女は語った。彼女は多くの写真や手紙、その他議論の余地ない確実な資料をもって自分の発言を例証した。

フェルトンは5ヵ月間にわたって国中をまわり、イングランドやスコットランドの様々な都市で、毎週12回～15回の報告をおこなった。彼女は閣僚たちに報告書を提出した。彼女が発行したパンフレットはすぐに売り切れた。彼女は労働党の国会議員団の前でも報告をおこなった。体調がすぐれないにもかかわらず、彼女はイギリス人民に朝鮮についての真実を伝えるという気高き任務にすべての精力を注ぎ込んだ。

平和のためのモニカ・フェルトンの活動と帝国主義者たちがおこなっていることの暴露はイギリスの反動勢力の憎悪を呼び起こした。戦争挑発者たちは彼女を大逆罪（これに関する法律は1351年にまでさかのぼり、定められている唯一の刑は死刑である）で裁くことを要求した。

彼女はスティーヴニッジ開発公社総裁の職を解かれた。反動的な報道機関は、彼女を脅し、彼女の信用を貶めるためにあらんかぎりのことを行った。しかし、どのようなことも彼女を押しと

どめることはできなかった。イギリスの街を見ると、いま朝鮮が陥り、明日には全世界が投げ込まれるかもしれない荒廃がそこに迫っていることを想像してしまうと彼女は語っている。彼女の活動は、イギリスその他の広範な大衆が、平和は待っていてはならず、勝ち取られねばならないということを理解する手助けとなった。

イギリスの一般大衆は、この勇気ある女性を守るために立ち上がった。なぜなら、モニカ・フェルトンに対する迫害は、平和に対する直接の脅威であり、この国に残っている民主主義と自由に対する直接の脅威であることをかれらが知っていたからだ。何千通もの抗議書が政府に押し寄せ、他国でも何百万人もの男女が彼女を守るために立ち上がった。国際民主女性連盟は60ヶ国・9100万人の女性を代表し、フェルトンの活動が世界平和の大義にとって価値ある貢献であることを指摘しつつ、イギリス政府に対して力強い抗議書を送った。

こうした圧力によってイギリス政府は彼女に対する告訴を取り下げることを強いられた。反動勢力はモニカ・フェルトンを執拗に攻撃し続けたが、彼女は自分が一人ではないことを知っていた。何百万人もの一般大衆、世界で最も誠実な平和のための闘士たちが彼女と共にいるのだ。

国際スターリン平和賞を受賞したと聞いてフェルトンは、自分はただ誰もがするであろうことをしてきたただ、と述べている。自分が朝鮮で見てきたものを見た女性ならば誰でも、自分と同じように行動するだろう。だから、この賞はイギリスのすべての平和の支持者たちの貢献に対する評価だと考えている、と彼女は語った。

出典： USSR information bulletin.v. 12, no. 13 (July 14, 1952). Embassy of Union of Soviet Socialist Republics., p.81.

(翻訳：池田高巖)

＜参考資料3＞ インタビュー

モニカ・フェルトンのインタビュー：ストップ・ザ・ウォー！

モニカ・フェルトンは1951年に朝鮮北部の状況を調査したWIDF（国際民主女性連盟）のイギリス代表である。イギリスに帰国して以降、彼女は報告書をつくり、活発に平和活動をおこなっている。その結果、彼女は政府機関であるニュータウン開発公社の総裁職を解任された。フェルトンはスターリン国際平和賞を受賞しており、1952年には二度目の朝鮮訪問をおこなった。

チャイナ・マンスリー・レビューは、さる10月に北京で開催されたアジア太平洋地域平和会議の際に、特別ゲストとして招待された彼女にインタビューをおこなった。インタビューのなかで、フェルトンは朝鮮北部の捕虜収容所への訪問や朝鮮人民によっておこなわれている闘争の印象について語っている。

Q：フェルトンさん、あなたは朝鮮で捕虜収容所を訪問しましたね。そのことについてお話ししてくださいませんか？

A：ええ、短い時間ですが第5収容所に滞在しました。鴨緑江に面した信じられないほど美しい場所で、背後には高い山が聳えています。私たちはフェリーで河を渡って収容所に行きました。ある村の3分の2が収容所にあてられていました。捕虜収容所の本部は村から約1マイル離れたところにあります。収容所の周りに鉄条網は張られていませんでした。捕虜たちは—アメリカ人、

イギリス人、コロンビア人、トルコ人などいくつかのグループに分けられていましたが、皆が村のなかを自由に行き来していました。

Q：私たちはごくわずかですがアメリカ人捕虜の家族からの手紙を受け取っており、その多くが収容所での生活条件を尋ねています。あなたの印象はいかがですか？

A：捕虜たちは朝鮮式の家屋に住んでいます。とても素朴ですが、清潔です。彼らは床にマットを敷き、毛布と硬い枕で寝ています。長い間硬いベッドを使っていたが、いったんこれを使ってみると、悪くはないし健康にも良い、と彼らは言っていました。家にはある種のセントラル・ヒーティングがあるので、冬でも暖かく過ごせると思います。朝鮮はそれを取り入れた世界で最初の国です。家の大部分は地面から建てられており、キッチンは低い部分にあります。床を暖房するための通気管が家の残りの部分の下を通っています。

Q：捕虜たちは食料について何か言っていましたか？

A：ええ、言っていました。食料は十分で、うんざりするくらいだ、と。イギリス人捕虜のなかには、豚肉が多すぎていやになるくらいだ、と言う者もいました。砂糖の配給は一人一ヵ月あたり1.5ポンドです。タバコの配給もあります。

Q：捕虜たちは毎日忙しそうにしていますか？スポーツやリクリエーションの施設はありますか？

A：捕虜たちは球技チームをつくっています。釣りや水泳もしています。各収容所には図書館があって、マーク・トウェイン、ディケンズ、ソビエト小説、政治文学などが置かれています。強制的な政治講習はありませんが、報道や全般的諸問題についての短い会話は、独特の英語まじりの中国語でおこなわれ、必須となっています。

ある大規模なアングロ・アメリカンの研究グループが組織されており、そのようなテーマや会合をおこなう方法について公然と話していました。

Q：捕虜たちの扱いについてのあなたの印象はいかがでしたか？

A：中国人たちは非常に熱心に要求に応えようとしていました。例えば、私は捕虜たちの多くが家族に手紙を書きたがらないことを知りました。封筒に「アメリカの侵略に抵抗しよう」と印刷されていたからです。私がこのことを中国側に伝えると、彼らは私に感謝しました。後に私が捕虜たちから受け取った手紙では、封筒にはただ「エアメール」とだけ記されていました。

私が会ったほとんどすべての捕虜たちが、個人的な所有物、時計などを保持することを許されていました。収容所に向かう行進のとき、朝鮮人を家から追い出した結果だけれども、つねに避難所があったと言っていた捕虜たちもいました。この春に収容所を訪問した国際民主法律家協会のイギリス人メンバーのジョン・ガスターは、中国人に対して、中国側は捕虜たちを丁重に扱い過ぎており、アメリカ人やイギリス人の捕虜たちは自分たちに奉仕する人民を見下しがちであって、捕虜たちに自分で仕事をさせたほうがよい、と言っています。この夏、私はアメリカ人とイギリス人の捕虜たちが中国人から提供された資材で自分たちのクラブハウスを建てたことを知りました。

Q：あなたが話した捕虜たちは平和についてどのように思っていましたか？

A：彼らには自分たちの平和運動があります。この運動は昨年春に始まり、アメリカ人将校を議長とし、イギリス人の兵卒が書記長をしています。捕虜たちが集まり、自分たちが平和団体をつくりたいということを確認し、この問題に関して他の収容所の捕虜たちとも会えるように朝鮮

政府の許可を求めました。彼らはすべての収容所からの参加で全体平和会議を持っており、現在では平和雑誌を発行しています。

私はこの平和運動で活発に活動している6人のアメリカ人捕虜、そして多くのイギリス人捕虜たちと話をしました。彼らは捕虜の多くが自分たちの見解を支持していると考えています。彼らは中国人から彼らに同意しない捕虜たちの反対理由を分析する方法を学び、現在では彼らとの関係は前よりも良くなっている、と言っていました。

Q：捕虜たちは休戦交渉について知っていましたか？

A：ええ、知っています。彼らは交渉の進展を非常によく追っています。彼らはそれはまやかashiで、交渉がこれまで長期にわたって合意に達しなかったのは米国に責任があると思っています。私が話したすべての捕虜たちは、この戦争が米国と南朝鮮によって始められたことを確信していました。

Q：捕虜たちは何か不満を口にしていましたか？

A：ええ、手紙について不満を言っていました。以前はすべての手紙が中国平和委員会を通して送られており、遅くはあつも届くことは届いたそうです。しかし現在、すべての郵便は休戦交渉団を経由しており、届いていないようだ、と彼らは言っていました。私はイングランドで定期的に息子に切り抜きを送っているというあるイギリス人捕虜の母親と話しましたが、私とその息子に収容所で会ったときに話を聞くと、彼はそれをまったく受け取っていないのです…。イギリス人捕虜たちはとくに、彼らの郵便に「米陸軍将校」というスタンプが押されていることに腹を立てています。私は何人かの捕虜から彼らが出したり受け取ったりした手紙のリストをその日付とともに受け取ったので、彼らの家族たちと共に確認したいと思っています。

ある若いアメリカ人捕虜は、双方の合意にはっきりと記されていたにもかかわらず、どうして収容所が爆撃されたのか、と私に言い、「こうやって自分たちの仲間が殺されたり、負傷したりしてしまうのです…。翌朝、収容所を離れて道を歩いている私を村の朝鮮人たちが見たとき、私は恥ずかしくなって地面に身を伏せました…。どうしたらこうしたことをイギリスの人民に知らせることができるでしょうか？ 私たちが帰国したらそのことを伝えますが、本当は今すぐにも伝えるべきことなのです…」と彼は苦々しくつけ加えました。

Q：あなたは細菌戦について告白した米空軍兵士たちと話しましたか？

A：ええ、私はクイン中尉と会いました。とても気さくで好感の持てる人物でした。ご存知のように、彼はキリスト教徒です。最初、読むようにと何冊かの本を渡されたとき、それを見るのを拒んだ、と彼は私に言いました。ある日、彼はカンタベリーの司祭の「The Socialist Sixth of the World」という本を手渡されました。この「赤い司祭」の思考は彼を動揺させ、読まずにはいられなくなったそうです。読み始めると、彼は読むのをとめられなくなりました。この本とエプスタインの「未完の中国革命」(Unfinished Revolution in China)によって自分は考えることを始めた、と彼は言っていました。

彼は自分が関わった細菌戦に個人的な罪悪感をもっていたようです。彼は自分の心のなかの葛藤について話しました。というのも、彼はアメリカとアメリカ人を愛しており、「世界最良の場所」というほどアメリカに深い忠誠心をもっていたからです。しかし、彼は細菌戦への自分の関与を告白したことは正しいことだと確信しており、その結果を受け入れる心構えをしていました。彼は、東欧の裁判では告白させるために薬や拷問がよく用いられたと本で読んだと言ったうえで、にやりとして「僕が薬が使われたり拷問をされたりしたと思いますか？」と私に尋ねました。彼は家族は自分の立場を必ず支持してくれると思っていた。

Q：今回朝鮮を訪問し、何か前回と違ったところがありましたか？

A：あります。私は朝鮮が二つの重要な点で変わったことに気づきました。第一に、物理的破壊の度合いがますます激しくなっていたこと、そして第二に、普通の人民の勇敢さは、最初の訪問のときも私の心を打ったのですが、それが静けさを帯びつつ、ますます強いものになっていたということです。

1951年には平壤はすでに廃墟と化していましたが、柱だけ残った建物が点在していて、それが避難場所になっており、郊外の小さな小屋にはたくさんの人が集まって住んでいました。しかし、最近の攻撃はきわめて激しく、今年は建物の柱さえ残っておらず、郊外のあばら家も粉々になっていました…。そうした「軍事目標」の跡には、ばらばらになったタイル、黒焦げになった材木、壊れた壺の破片、ぼろきれ、あるところでは壊れたおもちゃなどが残されていました。

Q：そうした最近の爆撃の影響はどのようなものだったのですか？

A：そうですね、9月16日の朝、私は前夜の爆撃でどうなったかを見に行きました。ある村のごく小さい家々に爆弾が投下されたのですが、そこはごくわずかでも軍事的重要性をもつ建物から遠く離れたところにありました。玉ねぎやキャベツの畑には爆撃による大きなくぼみができていました。

負傷者—そのほとんどは女性や子どもたちですが—は病院に担ぎ込まれ、亡くなった人々にはわか仕立ての棺に入れられました。近くには他の死体や爆風でばらばらになった人間の手足がまだ置かれていました…。私はある老人に空襲のとき防空壕にいたかどうか尋ねました。彼は私を非難するように次のように言ったのです。

「他の人々が私が受けたような被害に苦しみ、私の手助けを必要とするかもしれないときに、どうして自分が防空壕にいることができたでしょうか。」

この68歳の農民は、今日の朝鮮の重要な一部分です。なぜなら彼は、決して挫けない人民の精神をかたちづくっている静かな勇氣と断固たる決意をもった人物の典型例だからです。私はこうした精神の持ち主に朝鮮北部の至るところで会いました。

Q：このような人民の勇氣ある態度の理由は何であると思いますか？

A：私は先に朝鮮人民の勇氣は静けさを帯びていると言いました。この静けさというのは、絶え間ない爆撃にもかかわらず勝ち取られてきた成果のあらわれなのです。朝鮮における生活は今日、単に生き延びたということにとどまらず、前進しています。郊外では豊作で、被害を受けた家畜もすぐれた繁殖方法によってその代わりが見つかっています。

平壤でも新しい生活がひそかに進行しており、生産的な仕事や文化活動は爆撃を免れています。外では孤児となった子どもたちが治るまで手厚く看護されており、それは世界の手本になるものです。朝鮮の女性たちは、子どもの面倒を見ている女性であれ、病気がちの女性であれ、田畑を耕している女性であれ、ひとつの決意、未来への確信に満ちた強く快活な精神を示しています。朝鮮人民は最も崇高な意味でその勇氣を示していますが、それは世界が黙認してはならない環境のなかでの勇氣なのです。朝鮮にはびこっている恐怖は、知ってのとおり世界を破壊しうる恐怖なのです。朝鮮における戦争は、長く、あまりにも長く続いています。世界の人民が行動を起こし、それを終わらせるときがきているのです。

出典：'An Interview with Monica Felton — Stop the War', "the China Monthly Review",
January 1953, pp.20-27.

(翻訳：池田高巖)

<参考資料 4> 小冊子

朝鮮！～兵士たちを帰還させる方法～

著：モニカ・フェルトン

発行：英中友好協会

朝鮮で戦争が始まってから二年半になる。休戦の方法についてのソビエト連邦の提案が公にされてから一年半以上が経つ。それに先立つ一年間の戦争ですでに荒廃していた朝鮮の国土は、さらにこの一年半の間に自分の目でそれを見た人でなければほとんど信じがたいまでに荒廃した。この一年半の間に、数百人のイギリス兵と数千人のアメリカ兵が死傷した。イギリスの数万人の家族、そして数十万人のアメリカの家族が、戦線でたえず危険にさらされている多くの夫や息子たちの帰還を待ち望んでいる。数千人が二年あるいはそれ以上捕虜収容所に収容されている。

昨年冬、イーデン氏を含む政治指導者たちは、クリスマスには兵士たちが帰還すると自信たっぷりに語っていた。それからもう一度クリスマスを迎えた。しかし、兵士たちは故国に戻っておらず、帰還の見通しはむしろ一年前よりもさらに暗くなったように思われる。

非難されるべき者は誰か？

昨年2月の時点で、休戦協定の締結を遅らせている問題は二つだけだった。一つは捕虜の本国送還であり、もう一つは北朝鮮の飛行場の査察であった。アメリカのニュース雑誌『タイム』1952年2月4日号は、「国務省は次のような問題への回答を準備するための政策立案者の『委員会』を設置した。その問題とは、これ以上コミュニストと平和を語ることに意味はあるのか？その答えが否であるならば、飛行場か捕虜か、どちらの問題でわれわれは決裂すべきなのか？というものだ」と報じている。

協定は飛行場の問題について合意に達した。おそらく国務省は捕虜の送還問題のほうは人々の感情を刺激しやすいと考えたのだろう。

17ヵ月間の停戦交渉の過程で、一方の国連軍を代表するアメリカと、他方の北朝鮮および中国義勇軍は一つを除いてすべての問題で合意した。その一つとは捕虜の送還問題であるが、実はこれに関する条項は協定の草案には存在していた。休戦協定草案の第51条は「この休戦協定が発効した時点で双方に拘留されているすべての捕虜は、できるかぎり速やかに釈放され、送還されなければならない」と述べている。休戦協定の他の62項目は草案に書かれただけでなく、実際に合意された。

しかし、中国と朝鮮が捕虜問題の解決を主張しているなかで、10月8日、休戦交渉のアメリカ代表団の代表であるハリソン將軍は突如として何の説明もなしに交渉は終了したと告げた。

ジュネーブ条約

中国と朝鮮が自らの立場とする捕虜送還に関する国際法はシンプルなものである。1949年のジュネーブ条約は特に次のように述べている。第118条「戦闘行為の停止後、捕虜は遅滞なく釈放され、送還されなければならない」。また第7条では「捕虜はこの条約によって自らに保証された権利を部分的であれ全体的であれ決して放棄するものではない」と述べられている。

アメリカ代表団は何ヵ月間にもわたって、この条約が彼らに要求している捕虜の送還ではなく、送還すべき捕虜とそうでない者を選択しうるようにすることを主張してきた。このアメリカの提案は国際法と長年にわたって確立されてきた国際的慣行に違反している。

『タイム』は11月9日の社説で、「数々の平和条約や捕虜の取り扱いに関する国際協定（1949年の最新の条約を含む）によって十分に裏付けられているこれまでの国際的慣行は、戦争終結後の捕虜の例外なき故国への帰還を支持していることを認めなければならない」と述べた。『デイリー・エクスプレス』は12月17日の社説で、「その条約（原注・ジュネーブ条約のこと）は『戦闘行為の停止後、捕虜は遅滞なく釈放され、送還されなければならない』と明確に述べている。この文言を前にして、イギリスとアメリカは中国がその送還を求めているすべての捕虜を手放さずにいることを正当化することができるだろうか」と書いて警告を発した。実は、現在の状況のような危険性は、ジュネーブ条約が最初に審議されたときから予見されており、この特定の条項を詳細に検討するために特別委員会が設置された。この委員会は、イギリスの代表団をも含むものであったが、現在の文言が捕虜の権利を最も良く表現していると主張した。

ジュネーブ条約で規定された文言は、捕虜自身の利益を規定するものだと常に理解されてきた。条約はそのように表現されてきたのであり、そうでなければ自分たちが拘留を望んでいる捕虜は合意によるものだと主張することはすべての交戦国に受け入れられているだろう、と『タイム』は指摘している。

法律上の問題はきわめてシンプルである。先の引用は、人道上の条件に関する問題は同様にシンプルであることを明らかにしている。言い換えれば、アメリカ政府は—ジュネーブ条約に署名した国の一つであるが—こうした提案をおこなうことで条約それ自身を侮辱しただけでなく、この違反が他の紛争当事国によって合意されない限り戦争を継続することを宣言したのである。それゆえ、アメリカ政府は、イギリスとアメリカの家族に押しつけられている苦難と痛み、そして朝鮮民衆に対してなされ続けている信じがたい残虐行為をもたらししている戦争の継続に完全な責任を負っている。

捕虜の取り扱いについての違いが、戦争を続けるために利用されている。しかし、この問題はまず戦闘の熱を冷ますことができればより穏やかに解決できるだろう。これが無条件即時停戦の要求の核心だ。この要求は11月6日に労働党を代表したノエル・ベーカー議員によって前面に出された。彼は63項目のうち朝鮮での交渉団によってすでに合意されている62項目にもとづく即時停戦を要求した。ノエル・ベーカー氏は、これは二段階にわたっておこなわれると提案し、「第一段階では、すでになされた合意にもとづいて停戦する。これで停戦を監視する実質的な協定がすべて解決される。第二段階では、捕虜の帰還についての協定がなされることになるだろう」と述べた。イギリスとアメリカの政府がこの提案を受け入れれば、朝鮮での戦争の終結に道を開くことになるだろう。

国連総会

10月、ハリソン将軍が休戦交渉を決裂させた二週間後、国連総会が開催された。11月には、インドの国連代表団を代表してクリシュナ・メーモン氏が捕虜問題に関する決議案を提出した。この決議案は中国と北朝鮮によって拒否された。彼らは、中国も北朝鮮も国連での討議に参加することを認められておらず、この決議案は違法・無効であり、またジュネーブ条約第118条違反を支持していると批判した。実際、この決議は朝鮮戦争をただちに終結させる方法を提議するものではなかった。

総会での討議の最終日にクリシュナ・メーモン氏によって修正されるまで、決議案の前文の末尾では、この提案は「即時停戦をもたらすだろう彼らの合意を求めて」中国人民政府および北朝鮮当局に送られるべきである、と述べられていた。

言い換えれば、中国と朝鮮がこの提案の条件—アメリカの提案と同様のもの—に同意しない限り、戦争は続くということである。これがインドの決議案の意味することである。

インドの決議案は、ジュネーブ条約が要求しているすべての捕虜の送還を求めている。ジュ

ネーブ条約のシンプルな提案の代わりに、この決議案は捕虜の取り扱いについて、まず中立機関が、次いで政治会議が、そして最後に「国連」、すなわち戦争の当事者であるアメリカの司令部が取り扱うという煩わしいシステムを提起している。このような計画は捕虜に新たな屈辱と苦難をもたらすだけであろう。朝鮮と中国はこのような条件は拒否する以外にないと感じている。

インドの決議案が提出される前に、ソビエト連邦を代表してヴィシンスキー氏がすでに、本質的な点ではノエル・ベーカー氏の提案と同様であり、即時停戦と捕虜の送還を討議するための11人委員会の任命を呼びかける別の決議案を提出していた。ヴィシンスキー氏はさらに、この委員会はアメリカ、イギリス、フランス、ソ連、中華人民共和国、インド、ビルマ、スイス、チェコスロバキアおよび南北朝鮮の政府の代表で構成されるべきだと提案した。ソビエト連邦の決議案は否決され、インド案が可決された。そして、戦争は続くことになった。

アメリカ政府が、同等の地位と権利をもつことを認められているどの国の政府に対してであれ、ジュネーブ条約に違反することが許されるべきだという提案をあえておこなうことはありそうもないように思われる。アジアでは、まさに原子爆弾が西洋の人々には投下されなかったように、国際的な権威を侮辱するような方法はアジアの人々に対してのみ向けられるだろうと感じられる。おそらくそれは『タイム』が、先に引用したのと同じ社説で「国連が今、この公認された原則の正当性を攻撃するならば、それはおそらく間違っており、彼ら自身の捕虜の権利を損なうだろう。彼らがし続けなければならないことは、例外を設けることを追求することである」と書いた、アメリカの要求のなかにある固有の危険である。

ある国の都合にあわせて、長期にわたる注意深い交渉によって合意された国際協定が無効にされるならば、国際法と国際秩序の維持はどうすれば可能だというのだろうか？

次は何か？

アメリカのように、武力が勝利をもたらすと想像することは、まったくの愚の骨頂だ。彼らの兵力にもかかわらず、戦争遂行のための最新の方式をもってしても、二年半にわたって彼らは前進をはばまれている。しかし、彼らは朝鮮の平和を求めるのではなく、なおも戦争の継続について考え、「勝利」について語っている。だからアイゼンハワー将軍は、彼の最近の朝鮮訪問の最後に、戦争の終結についてではなく「局面の回復」について語り、彼の話が「勝利」の計画と関係していることを認めつつ、「戦争を拡大する多大な危険を伴うことなしには完全な勝利をもたらす計画を練ることは困難である」と述べたのだった。また李承晩については、「私が話すべき名誉を受けた李氏について言えば、彼は偉大な指導者にとってのすべての資質を持っている」と言明した。李承晩自身はこの2人の紳士が朝鮮で話し合った内容を明らかにしている。すなわち、武力による朝鮮の統一である。アイゼンハワー将軍は戦争を中国に拡大することによって勝利を得られると信じているのだろうか？

12月11日、モルガン・フィリップス氏は労働党の関連団体に向けて声明を発表し、インドの決議を支持することを求めた。この決議はノエル・ベーカー氏が労働党の下院議員を代表して作成した提案—政府が採用するならば戦争の終結をもたらす提案—と明らかに矛盾していた。それゆえ多くの労働党員にとって、ノエル・ベーカー氏の提案の後でモルガン・フィリップス氏があらかじめ北朝鮮と中国には受け入れがたいと分かっている条件でのみ停戦を持ち出しているインドの決議に対して労働党関連団体の支持を要求するのは奇妙なことに思われた。モルガン・フィリップス氏の書簡は問題を混乱させるだけでなく、即時停戦の提案を拒否することによって戦争の拡大の危険性を増大させるものであった。アイゼンハワーとマッカーサーの会談および李承晩の声明は、それが彼らの「勝利」への道であると人々に思いこまようとしている。しかし、それはイギリス労働党の政策でもイギリス民衆の政策でもない。ますます広がる意見は、戦争が拡大されるべきではなく、終結されるべきことを要求している。

わが兵士たちは？

私は朝鮮に滞在している間に鴨緑江の捕虜収容所を訪れ、多くのイギリス人およびアメリカ人の捕虜たちと会って話をした。彼らはそれなりの条件で生活し、栄養も十分で、よく配慮され、注目すべきほどの自由を享受していた。私は収容所に長く滞在し、私的な会話に十分な時間を費やし、その結果、彼らの多くが家族に宛てて送った手紙のなかで表明していた見解の誠実さと真剣さを完全に納得した。朝鮮に派遣されるまで、国際問題についてははっきりした見解を持っている者は一もしいたとしても一ごくわずかだった。彼らは、自ら進んでにせよ、いやいやながらにせよ、戦うために派遣されたが、彼らが言われたのは集団的安全保障の原則ということだった。今では彼らは朝鮮民衆の生活と生命の破壊を強いられたことを通して、イギリスとアメリカの政府が自国の民衆に言ってきたことの欺瞞を学んだ。彼らの多くが、無為を強いられるなかで、国連憲章を勉強しており、この勉強によって彼らは自分や自分の同僚の捕虜たちが、合法的でなく道徳的正当性もない朝鮮民衆に対する侵略行為に参加させられたことを確信した。「われわれは最悪の理由の戦争に引きずりこまれた」と彼らは私に直截に語った。「故郷に帰ったら、われわれまづ皆に真実を話して自分たちの経験を共有するだろう」。

「われわれが故郷に戻ったら…」私は帰還についての彼らの見解が、まったくの自然なホームシックではない何かにもとづいていることに気付いた。彼らは再び家族に会うこと、子どもたちと遊ぶこと、くつろいだ家庭生活を味わうことを切望している。しかし、彼らは私に、まずしなければならないことはそれとは別のことだと繰り返し主張した。彼らの多くは、「この朝鮮での戦争は、公認の国際協定を破って開始された。われわれはここで話し、読み、考え始めるまで、そんな協定はまったく知らなかったし、国際問題がどのように扱われているかほとんど知らなかった。しかし、様々なことを理解できるようになって、われわれは捕虜問題の解決にはただ一つの方法しかないこと、すなわちジュネーブ条約を遵守し、これまでわが国が常にそうしてきたように例外なくすべての捕虜の交換をおこなうしかないことを知ったのだ」と私に語った。この問題への関心がいかに深いかは、それぞれボグナーリージスとボーンマスに故郷があるジョン・アンダーウッドとジョージ・リチャーズという2人の捕虜の手紙から見てとることができる。彼らは次のように書いている。「朝鮮戦争に関して、われわれは板門店で和平交渉がおこなわれるたびに、とりわけ最新の問題、すなわち任意の捕虜の送還という情勢に接すると、苦い失望の念を表明せざるをえない。交渉が始まったとき、われわれは解決にもっとも時間がかからない問題は、すべての捕虜の帰還の問題だと考えていた。しかし、これは最も困難な問題であるようだ。現在のわれわれの考えでは、速やかにこの戦争を終わらせようとする誠意がない者たちがいることは疑いない」。同じ収容所から五人の署名がある手紙が書かれている。「本当に親しい者以外は誰もわれわれのことに関心をもっていないのだから、この収容所では希望を失い、事態を傍観し、『われわれは忘れられてしまった』と言うことはとても簡単なことだ。このような状況を歓迎している者がいるのだ。もしわれわれが忘れられているならば、われわれを黙らせ、真実を覆い隠すことは簡単なことだろうから」。

これらの手紙は外交の言葉では書かれていない。しかし、その言葉は基本的には単純な問題の真の性格を覆い隠すために使われてきた手の込んだ偽装をはぎ取ることを学んだ一われわれも皆それを学ばなければならない一男たちの言葉なのだ。そして、捕虜にとって問題はまったくシンプルで、まったく明白である。彼らは故国で妻や子どもたちと暮らすことを切望しているが、自分の子どもたちは彼らに痛く苦い経験をもたらした世界とは異なり、戦争の恐れや戦争がもたらす苦難から解放された世界で育てなければならないと固く心に決めている。彼らはそのような世界はただ公認の国際法を基礎にしてのみ創りだすことができることを知っている。なぜなら、彼らは朝鮮の破壊が国連憲章を破ることによってのみ可能となったことを知っており、ジュネーブ条約を蹂躪することによって真の平和の土台は決して築くことができないことを確信している

からだ。彼らの要求はシンプルなものだ。すなわち、故国に戻ることである。しかしそれは、平和な世界のうちに、国際法を承認することがすべての国の国家安全保障にとって第一の防衛手段であるような世界のうちに故国に戻ることなのである。

しかし、捕虜は自ら語ることができない。彼らはイギリスの民衆が彼らのために声を上げることがを求めている。この戦争は速やかに終結させることができる。読者の皆さんや皆さんの友人たちが抗議の声をあげるなら、皆さんは彼らを助けることができる。工場やオフィスから、地域から、労働組合や協同組合から、そして皆さんがどの政党に属していたとしても、戦争の継続に抗議し、即時停戦を要求する決議を送ろう。このような決議が洪水のように送られれば、それは必ずや首相や地方議員を動かすだろう。このような圧力に逆らうことができる政府はないし、北朝鮮の第5収容所にいる装甲自動車隊兵士フォーセットと4人の同僚が書いているように、「最後にはわれわれが勝利し、このひどい紛争の終局はここ以外の場所からもたらされるだろう」。

原著：Monica Felton, "Korea! : how to bring the boys home", London : Britain China Friendship Association, 1953

(翻訳：池田高巖)